

中期フッサールにおける知覚・直観・注意

鈴木康文

はじめに

最初に現象学について、ある年代以上の研究者によく知られたエピソードを紹介しよう。

アロンは自分のコップを指して、『ほらね、君が現象学者だったら、このカクテルについて語れるんだよ、そしてそれは哲学なんだ！』

サルトルは感動で青ざめた。ほとんど青ざめた、ということ。(1)

このエピソードは一九三二年のパリのことであるが、現象学の意義をよく捉えていることで知られ、日本でも、現象学の入門書として読まれた木田元の『現象学』の序章にも取り上げられている⁽²⁾。従来の哲学が目指す普遍性とそれに伴う抽象性に対して、

現象学が現実性と、なにより身近な個別的現実からの哲学を標榜していることを端的に示している。すでに忘れ去られつつある話ではあるが、おそらく現在においても現象学の位置づけを示す逸話と言えよう。

実は筆者（鈴木）も、三五年以上も前になるが、大学院生時代のフッサールの輪読会（自主ゼミ）においては、こうした事象分析として、「ここに一枚の灰皿があつて……」と目の前にある灰皿を使つて、その見られた事物としての灰皿とその意味規定、知覚作用、さらに灰皿の見え隠れ（一面的な見え）から、現出物の現出との同一性と差異性……等々、解読しているテキストを素材として記述していった。これはフッサールの資料についての読みとその解釈を行うと共に、それが事象として読み取れているかをゼミに同席している諸先輩方に呈示している作業でもあった。一般的な演習では、一次資料の読みと解釈が中心となるが、フッサールの演習の場合、さらに付け加えてこうした事象分析を行うこ

とがその特徴を示すものとなっていた。

こうした事象分析は、なにも気取った幻想的なポーズとして行っていたわけではなく、事象に即した現象学の分析の特徴といえる。ここで取り上げ、またサルトルが受容した（と考えられる）『イデーンⅠ』においても、花咲くリンゴの樹の下での知覚体験やその気持ちなどを記述し、この知覚されたものと知覚作用、およびその所与から現象学分析を行っているわけである（H.III/1 203）、ある種典型的な導入といえよう。

一 本稿の課題

ここで本稿の課題であるが、こうした事象分析を改めてなぞることではなく、こうしたエピソード（事象分析）にあらかじめ含まれている前提に着目し、その前提から事象分析を試み、その前提そのものを問いかけたいと考えている。

ここで前提としているのは、見られたワイングラスや灰皿ということで、「意識において知覚された事物対象」を出発点とした事象分析・志向分析がされているということである。出発点としての見られたワイングラスを中心に分析がなされることとなるが、その際、ワイングラスが見られていることが常に前提として記述されている。しかし、それは知覚過程からの分析ではない。我々は何かに関心をもち注意をそちらに向け、そのような場面の

なかで当のものが、ワイングラスとして知覚されていく。それに対して『イデーンⅠ』の論述の歩みは体験の側からの論議とは異なる方向といえよう。この場合、フッサールは『イデーンⅠ』においてその前提自身を分析の俎上にあげ、体験の側から知覚の分析を試みたのであろうか。こうした問題あるいは疑問に対して、『イデーンⅠ』は答えることができるだろうか。

筆者がここに課題を見出すのは、すでによく知られているが「不注意盲」と呼ばれる認知心理学上の知見として、対象が目の前にありながら、その対象の認識に至らないという事態があるためである^③。現象学的な知覚モデルがこの事象をも含んだ枠組みかどうか問いえるし、この事象がその試金石となると考えられる。

こうした課題を探求するために、まず『イデーンⅠ』の主題を確認し、さらにその主題をどのように展開し説明しているのかを、目次に即して簡単に素描する（第二章）。『イデーンⅠ』のような大著を簡単に要約するというのは、かなり無謀なようにも思われるが、あくまでも本稿の知覚認識に関する限りであることを断りしておく。これによって、先に述べたこの著作で扱われる事象が知覚であることと、その掲げた主題との齟齬が呈示されることになる。

先走りになるが、知覚を中心にノエマの意味とその充実、認識と理性といった分析がなされ、現実認識が記述されるが、知覚が

その事象に即して分析されているわけではないことが確認される。

そこで次に、『イデーナー』に基づいて、知覚現象をその過程に対応して再構成することにする(第三章)。それによって事物の知覚認識がいかに成り立つと当時のフッサールが描いていたかが明らかにされる。

その上で、知覚論における特に意味、直観、および注意の概念規定に着目しそこに含有する機能を分析して、本稿の課題について論説する(第四章)。これによって、当時のフッサールの知覚理論が抱えていた諸問題を指摘することができよう。

二 『イデーナー』の主題と概説

『イデーナー』の主題は、たとえば、後に出版された英語版の「あとがき」では「純粹現象学もしくは超越論的現象学という名辞の下で、ひとつの新しい学の基礎付けを試図」(H.V 14)すると明記しているとおり、学、基礎付けがその全体の目的である(「ひとつの新しい学」と主張しているが、その新しさについては、超越論的主観性という経験領野に関係づけられていると述べており、それもデカルト以来準備されていたという意味での新しさであると断っている)。

そして「緒論」(H.III/1 Stf.)においてその任務のためにその構

想が提示されている。

まず、現象学が事実学ではなく本質学であること、現象学が扱う現象とはある異なる態度によって変様されたものであり、その態度が現象学的還元によってもたらされる。そのためこの方法の道筋を呈示することが必要となる。現象学的還元によって「超越論的に純化された意識とその意識の本質的な相関者」を明らかにする。さらにこうして開示された純粹意識の普遍的な構造について分析することが課題として述べられている。

ここで簡単に『イデーナー』の目次に即して、その概観を確認してみよう。

「第一編 本質と本質認識」

「第二編 現象学的基礎考察」

「第三編 純粹現象学の方法と問題について」

「第四編 理性と現実」

概ね「緒論」で規定された目的とその構想に即して、論説がなされていることが確認できる。

すなわち、「第一編 本質と本質認識」においては、知覚された事態のなかで、事実と本質について現象学の規定がなされ、事実が本質(意味)において規定されていることを明示し、いわゆる事実認識において「本質直観」が(すでに)なされていること

を示している。そしてそれが今後の解明への足がかりになるわけである。

次の「第二編 現象学的基礎考察」においては、方法としての現象学的還元の意義と、それによる自然的態度から現象学的態度という態度変更の方途が示される。その現象学的態度によつて純粹意識の領域が開示され、現象学がこの純粹意識を領野とすることが確認される。

さらに「第三編 純粹現象学の方法と問題について」において純粹意識の一般構造が解明される。意識があるものの意識であることから、純粹意識が、体験される実的成素と志向的内容にまず区分される。そして意識の作用面（知覚作用、想像作用等）としてのノエシスと、意識された内容の面に関わるノエマの層の分析がなされる。

最後の「第四編 理性と現実」においては、実は保留にしていた現実認識の問題に着手する。ノエマ自身の側から現実の対象への関係が明らかにされ、そこに働く（フッサール独自の）理性が述べられる。つまり単にノエマの意味として意味規定にとどまらず、それが「意味の充実」という形で現実の対象の認識にまで至るまでを分析している。現実認識と理性の問題として解明されるわけである。

簡略ではあるが、『イデーニー』の枠組みを示した。ただこゝでさしあたり確認すべきことは、現実の事物認識において、知覚

が主題となつてゐることであり、それは想像でもなく期待でもなく、さらには想起でもなく、知覚が対象そのものの認識の源泉だからであり、知覚による認識構造をいわばモデルとして論述を展開しているからである（H/III/76）。

このように『イデーニー』で論述される事象は主に知覚（視覚）であるが、その著述はその事象に即しているであらうか。

事象としては知覚を重視し、それをいわば典型的な認識モデルとして採用している。しかしその目次を確認すると、事象過程（感覚与件からの知覚認識の成立）に即しているわけではなく齟齬が見られる。これはもちろん、目的が学の基礎付けであり、その基礎付けの基盤としての超越論領野である純粹意識の開示、さらにその領野に至るための態度変更をもたらす動機付けとしての基礎付け理念や、態度変更を辿る、いわば追体験としての方法である現象学的還元こそが論説されているからである。知覚分析はあくまでのその一貫として、いわば組み込まれているわけであり、さらには知覚分析に即して論説が展開されているわけではないことは明らかであろう。そしてその問題からするなら、「第一編 本質と本質認識」において認識問題を扱う中で、既に知覚において意味規定が既に成立していることをあらかじめ確認し、さらにそれを受け容れていることとなる。それが今後の『イデーニー』の論述過程のなかで、前提ではなく、あくまでも分析対象として探究されているかどうかがいわば試金石となろう。

三 『イデーナー』における知覚認識の成立

そこで本稿における課題のために、一旦は『イデーナー』本来の課題から離れ、この主著において知覚に関わる論述部分を取り上げて、知覚のプロセスとして再構成してみることにする(H.III/1 202ff.)。

たとえば、目の前にリンゴの樹があつてそれを見ているとする。それは実在的な関係であるが、それが幻覚であつた場合には、その実在関係は成立しない。しかし意識においてそのリンゴの樹がみられているという体験そのものは意識において与えられている。つまり知覚作用と知覚されたもの(この場合のリンゴの樹)との関係は「志向的な関係」として成立している(もし幻覚であつた場合には、非実在という存在性格のもとでその志向的な関係は成り立っていることになる)。

この作用の側が「ノエシス」、作用によつて捉えられた内容が「ノエマ」と言われる。実在としての樹木そのものは丸焼けになつたりする。しかし樹木として「知覚されたもの」(その内容)は丸焼けになつたりしない。それは実在的な特質をもたず、知覚の「意味」として規定された内容である。これは意識における時間の流れ(体験流)において知覚がそのつど刻々と変化しながら、しかし知覚された内容であるリンゴの樹は同一性を保持してい

ることから、それは意味的な同一性であることが示される。ノエシスは、知覚の他にも、たとえば想起、期待、想像などの諸作用があるが、先に指摘したようにフッサールにおいて知覚は対象自身を与えることから特権的な位置づけがなされている。

作用によつて認識された対象・内容であるノエマは、その存在性格(指定性、非指定性)を含めて多重構造(と命題的構造)をもっているが、本稿においてはこれには踏み込まない。ただここで知覚されたリンゴの樹が視点を變えることによつてその見え方が異なることに触れておきたい。リンゴの樹より目の前のお椀のような物のほうがわかりやすいが、お椀を見ているといつてもそれはその一面にしかすぎず、一定の方向からのお椀であり、ただそのお椀を動かしたり、あるいは視点を動かしたりすることで多面的なお椀の面が見られる。我々が直接見ているのはあくまでもそのお椀の一面にしか過ぎないがそれを介してお椀自身を同一の知覚物として認識している。この対象物とその内容規定自身それが自身、「ノエマ内の規定」となっていることとなる。事物(現出物)はある理念として、ノエマ的に解された現出の多様性に対する同一性をもつ規則の役割を果たしている(vgl.H.III/1 349f.)。

フッサールは意識における体験された内容について、もうひとつ重要な要素をあげ、ノエマとの区分をしている。それは意識体験であるヒュレー(感覚与件)であり、たとえば色彩体験や拡が

り感覚、触覚感覚などがそれにあたる (H.III/191c)。この具体的な体験与件は、そのノエマである彩りとは区別されねばならない。前者はたとえば体験されている赤や白といった色彩感覚内容であり、それに対して後者はたとえば事物であるリンゴの表面(皮)の赤色である。フッサルは後者を「現出する事物の諸契機である彩り」と規定し、前者との関係では、「感覚内容を介して『呈示』されて体験」されているとしている (H.III/192f)。前者がただ単に体験されているのに対して、後者は志向的な体験として位置づけられる⁽⁴⁾。

用語上のこととしては、感覚与件(ヒュレー)やさらに作用(ノエシス)自身は、直接体験されているので実的構成要素と規定されるのに対して、その感覚内容をいわば素材として作用によって捉えられるのが、志向的相関者である志向的内容(ノエマ)と言われ区分される (H.III/1202)。

四 知覚過程からみた『イデーニー』の問題

以上簡単に、『イデーニー』における知覚認識の素描を試みた。特にその認識におけるそれぞれの成素とその連関が示された。しかしこの構造分析は実際の知覚過程に即して考察した場合、いわば問題含みであることを示してみよう。

四・一 意味付与作用について

まず体験が単に体験にとどまらず、志向的体験となることにについて考察してみよう。

つまり体験は単に体験されるのではなく、或るものの現れ(一側面、たとえばリンゴの色合い)として体験されるということの動機付けが問われる。

前者から後者への成立についてはフッサルは次のように述べる。

感覚的諸契機の上に、いわばこれを生気づける意味付与的な一つの層が横たわっており、……その層を介して具体的な志向的体験が成立する。(H.III/192)

すなわち、志向的体験はそれ自身が、「意味付与による統一」であり、感覚与件はその「意味付与のための素材」の機能を果たしていることになる。意識があるものの意識であり、それが事実についての認識であろうと、そこには意味的に規定された本質を持つており、それゆえ同一的な内容を保持していることとなる。「意識の本質」が「意味」というものを己の内に内蔵する」と言われるゆえんである (H.III/194)。先に述べた「ノエシス」という用語もここに由来する。すなわちノエシスとは「最広義の又

ース（理性・思考）」であり「ノルムを包括」しているわけである。

そしてノエシスの諸契機のうちで意味付与作用が遂行される（H.III/1 194f.）と規定される。志向的体験はノエシスの契機によって意味を自らのうちに内蔵する（H.III/1 202）というように、志向的体験が知覚作用、意味付与作用、さらに感覚与件の契機によって成立していることは示されている。しかし意味付与作用自身が呼び覚まされる動機付けと契機については、記述に至っていないことになる。

その動機付けに関わる記述としては、

純粹自我が意味付与によりつつ自らがまさに「思念している」対象の方へと眼差しを向け、つまり自らの念頭にある対象の方へと眼差しを向け、さらには対象を把握し確定するということが、ノエシスの諸契機の例としてあげられる（H.III/1 202）

としているように、自我があらかじめ思念している、すなわち意味を志向している対象があり、それが眼前にあるときに眼差しがそちらに向かい、知覚認識が成立しているとしている。これはたとえば（本に書かれていることなど）表現された内容であれ、頭のなかであれ、その意味を志向し、さらに実際にそれが視界には

いったときに認識が成り立つというプロセスを示すと共に、眼差しの動きに関する動機付けが述べられている。しかしこれは『イデーニー』の論説に沿った分析であり、一般的な知覚過程ではないことは明らかだろう。

本稿がただ単に知覚のプロセスに関する事象分析を求めるのは、これが「不注意盲」の事象を捉えきれないことの一因であるとみなせるし、さらに（後にまた述べるが）フッサールの知覚モデルの制約を露わにしていると考ええるからである。実際のところ、『イデーニー』における冒頭で事実に関する意味規定から認識における意味規定を先行的に扱うことは、知覚分析においては適合しないと思われる。フッサールは前者を「志向・充実」という枠組みで規定している。これは単に志向された対象が、実際に知覚・直観されることによつて意味が充実され、それが認識に至るということを表しているのであるが、一般的な知覚認識がこの図式には当てはまることはない（志向・充実）の枠組みは前著『論理学研究』において採用されているが、『イデーニー』においてもこの図式の下に論説されているわけである）。

四・二 直観の多義性、操作的概念

このように知覚現象における認識について、そこに介在する意味付与作用については、一機能として介在していることは確認し

得るが、なお動機付けの下では問われていないことが示されたいえよう。

同様の問題は、知覚における「直観」に関しても示すことができよう（直観概念についてはある揺らぎが生じている、といえる）。さきに触れたが、知覚がいわば特権的な位置づけがなされており、それは次の引用からも確認できる。

直接的に「見る」ということ（ギリシヤ語で言えばノエインということ）、つまりただ単に感性的に経験しつつ見るということだけではなくて、どんな種類のものであれ、原的に与える働きをする意識である限りの見るということ一般こそが、あらゆる理性主張の究極の正当性の源泉である（H.III/43）。

見ることが「原的に与える働き」である限りで、理性認識の源泉であり、それなしには、認識が成立しないことを述べている。そして直観が「対象を与える働きをする」（H.III/11）と規定され、また次のように述べられる。

この直観のうちでこそ、当の区域の諸対象が、それ自身そのものとして与えられ、つまり自己所与性（Selbstgegebenheit）として現れるのであり、少なくとも部

分的には原的所与性として現れてくる。（H.III/11）

すなわち、直観によつて対象がそれ自身として現れるので、逆に言つて直観こそが、対象がまさにそれがあるとおりに対象を与える働きをしていると言われるわけである。そうである以上、直観とは少なくともその典型的な認識としては知覚であるといえるだろう。実際にフッサールの中では「対象を与える働きをする直観の役目をするものは、自然的経験」、「原的に与える働きをする経験は知覚」（H.III/11）といった言説もあるので直観がすなわち知覚で、それがさらに認識であるとみなすことが可能である（写像とは異なり、知覚が像ではなく、対象をそのまま受け取っている）。なによりもフッサール自身が「本質直観」という表現を使い、直観によつて個別事例が直観されるだけではなく、意味的な本質が認識されると述べていることからこの理解は妥当なものとされる（H.III/14）。

しかし先に指摘したように、認識自身においてはヒュレーが与えられていて意味付与作用の機能の元にその認識が成立しており、その場合、直観はあくまでも認識の起源として位置づけられている。

たとえば「その学問の認識には……その正当性を証示する基礎付けの根本源泉として、なんらかの直観がある」（H.III/10f）という記述からするなら、認識源泉としての直観が位置づけられ、

狭義に解するなら、認識と直観は区分されるべき機能であり、認識のすくなくとも一契機として直観が捉えられていることになる。知覚自身が課題として位置づけられているなかで、直観がどのような契機であり、いかなる機能を担っているのかが問われる必要がある(知覚が典型的で特権的な認識であり、また直観も広義にはその認識として規定されているが、しかし狭義においては直観は知覚の一契機として規定される)。

ただしフッサール自身がこうした要請に応えているとは必ずしもいえない。この点を「第三編 純粹現象学の方法と問題について」から辿ってみよう。

たとえば、この編の冒頭では「一義的な述語」を規定するため、「超越論的に純粹な意識の範例的な所与に即して、直接的な本質観取を遂行」(H.III/140) するとしている。それによつて意味は「充実する意味」をなすことになる。つまりすでに所与がなされ、それを源泉として認識が成立していることを出発としている。充実した意味もすでに認識がなされ、それが織り込まれているということの別表現である。さらに次節において所与性については、「所与性という名称を使うとき、……把握されているというありさまの意を同時に籠めている……、本質所与性の場合には、原的に把握されているというありさまの意を同時に籠めている」(H.III/143) と規定しており、意味志向された内容が把握されていて認識に至っているという事態の下での論述であることを

明示していることになる。こうして先行規定は、いわば『イデーンI』における「第一編」をそのまま受け容れた・前提とした分析であることを再確認しているとも受け取れる。しかしどちらにしろ、こうした論述によつては、知覚のプロセスにおける直観の機能が十分に論說することがなされておらず、つまり事象に即した分析に届かないことになる。

実際、直観における「与える働き」といった場合、個別直観に限つていっても何を与えるのかという問題については釈然としない。つまり事物としての対象(の一事例の例示)として解釈することも可能であり、その場合直観はいわば個別範例を示しているといえよう。しかし認識の一契機として捉えた場合には、ヒュレーをそれとして受け取っているという解釈も成り立つ。この場合、時間における形式を受け容れ、それゆえいわば「意味」という一定の構造が成立しているなかでのヒュレーである。

こうした基礎概念である「直観」の揺らぎについては、たとえばフインクの指摘からも確認することが可能である。

フインクはフッサールが用いる概念には「主題的概念」と「操作的概念」の二種に区分できるとみなしている⁽⁵⁾。前者はまさに思惟において思惟されたものを確定している概念であり、たとえば「超越論的主観性」概念などである。しかしこの主題的概念を形成するさいには別の概念を使用し、対象的確定がなされていない知的図式を用いて操作を行っている。後者が操作的概念と規定

される概念であり、いわば比喩的に「哲学の影」と称される。しかしこの光と影の比喩において主題とその背景、あるいは地平のようなイメージを持つべきではない。（おそらくここが重要だろうが）それは関心の外にあるのではなく、関心そのものであるとフイנקは述べている。

我々はこの関心をとおして主題に関係するからこそ、関心そのものは「主題のなかに」存在しない。それは観ることの媒体であるから観られないのである。⁽⁶⁾

すなわち、主題的に扱う事態として概念規定された思惟対象に対してその思惟におけるその遂行状態に関わる概念は、操作的に使用されるにとどまる、あるいはとどまらざるを得ないことになる。フイנקは、フッサールが使用している「現象、エポケー、構成、超越論的論理学」等の概念は主題的に解明されている以上に操作的に使用されているとしている。つまり両者の区分は区分としては成り立つものの、あくまでも機能上の区分であることになる。⁽⁷⁾ フイנקは挙げていないが、まさに直観概念自身、フッサールは操作的概念として使用しており、特に知覚分析においては知覚における一契機として常に機能しているものの、それ自体としては主題的に扱われなかったといえよう。⁽⁸⁾

四・三 『イデーン』における注意論

ここでさらに知覚における注意機能をどのように見なしいたのかを確認してみよう。

知覚において注意機能は、大きくはある事物に視線が向けられるような場面 (§25) と、すでに知覚されている事物をさらにより把握する場面 (§22) の二つに区分できる。

ただし、前者については『イデーン』においては単に用語上の問題として述べているだけであり、そこに働いている注意機能については簡単に触れる程度である。つまり本来的な知覚として紙を見ているとするなら、背景としての鉛筆やインク壺も視野に入っており、それを「背景直観の庭」をもっているとしている。「直観作用のなかにすでに注意し配意 (Zuwendung) している」とが含まれている場合には、注意力を含んだ背景直観という言い方がふさわしくないのだから、ぼんやりとした背景視 (Untergrundschauung) といいかえてもいい。」(H.III/1 71) と述べ、この課題については、それ以上踏み込んでいない。むしろ「ある対象へと眼差し（精神的な眼差し）を向け変えたあとで、注意深く知覚された対象、あるいは付随的に注意された対象になる」(H.III/1 72) と述べているように、早々に後者の課題に移っている。

（本稿の課題に引きつけて述べるなら、フッサールは「背景直

観ないし背景視もまたひとつの『意識体験』であり、……『意識』なのである」(H/III/171)と規定しているが、ここでの「意識体験」、「意識」が既に志向的体験であるかどうかは明示していないのであり、ヒュレーにとどまり続ける意識のあり方については規定していない。

後者の場面での注意は、「ノエシスのおよびノエマ的観点から見た注意の変動態」というこの節(§22)の題目からもわかるように、「ノエマ的要素は同一のまま」にあり、「精神的な眼差し」のもとに一定の知覚認識がすでに前提されている。そしてその注意の変動態は顕在性と潜在性の問題、すなわちより注意深くなるか、不注意になるかの問題として規定される。ここでフッサールは注意を明るく照らす光という一般的な比喻を用いている。その比喻については、「現出しているものにおける変化を暗示」している場合には適切なものであると述べている。いわゆる注意の「スポットライト説」であるが、つまりすでに知覚されたものについて注意によってよくわからなかったものがより良く認識されるということを確認している。しかし注意が向けられる以前から注意が向けられることによる「精神的な眼差し」の機能については、いわば保留にしているといえる(注意の機能については、その変動態を含めて、『イデーンI』においては考察しない (§30, §132) こととしており、それを『イデーンI』の本来の目的においては問う必要がないことを示すために、単に触れるにとどめ

ている)。

おわりに

本稿は、『イデーンI』が知覚分析をいかにしたのか、事象に即した分析をなしてきたのかを確認した。『イデーンI』自身は、学的基礎付けを行う課題から、特に知覚に着目して論述したのである。しかし本稿によって明らかにしたように、かならずしも我々が事物に着目して、それによって物を知覚するという認識プロセスに即した形で記述したわけではない。

なによりも知覚によってまず与えられるヒュレーからの分析として記述されていない。また認識における意味的规定、意味志向があらかじめ与えられたものとして記述され、まず与えられるヒュレーと意味志向が連関して認識に至るのかが論述されていない。それは知覚の分析にとっては大きい齟齬を生み出すものとなる。つまり知覚をモデルとしながら、知覚過程に関する分析がなされていない。あくまでも知覚が志向的意識であること、そして「志向」充実」の枠の中でその論述がなされている。

しかし、それはフッサールの関心が、知覚事象そのものにあつたのではなく、あくまでも学の基盤・論理学にあつたからといえよう。知覚分析としてなされるならば、問われるべきは、体験から志向的体験への過程であつた。

さらに知覚に伴う注意についても一定の制約がみられることになった。『イデーニー』は知覚に関して、スポットライト説をとっている。それは前著『論理学研究』が両義的な表現にとどまっていたのに対して (H.IX/169)、その比喩としての妥当性について肯定的に踏み込んだ形で述べている。しかしそれも知覚認識がすでに成立しているという条件の下であり、すでに現実として認識された内容をあらかじめ織り込んでいることになる。注意機能のもうひとつ重要な機能である眼差しを向けることについてはその機能の確認にとどまっており、これはすなわち体験がなにゆえ体験にとどまらず志向的な体験になるのかという知覚の問題について踏み込んでいないということの一面であるといえよう。

註

フツサル全集は、△△と略記し、引用巻数をローマ数字で、頁数をアラビア数字で表記する。

- (1) ボーヴォール『女ざかり 上』(朝吹訳) 紀伊國屋書店、一九六三年、一二五頁。
- (2) 木田元『現象学』岩波新書、一九七〇年、一頁。
- (3) 不注意旨の事例として、「見えないゴリラ」として知られるシモンズ&チャブリスの実験がある。

<https://www.youtube.com/watch?v=VJC698U2Mvo>

この問題については、拙論「フツサル現象学における注意・不注意の問題」、『北陸宗敎文化』第三二号(北陸宗敎文化学会、二〇一八年三月、を参照)。

- (4) フツサルは図式的に、感覚的ヒュレーを素材、志向的モルフエーを形式として規定している。ただしこれはあくまでも図式的な規定であり、ヒュレーを文字通り素材として述べているわけではない。たとえば体験自身が時間の流れのなかにある体験流であり、時間性は「体験と体験を結合するある必然的な形式」を有している (H.III/182)。それゆえ、ヒュレーもあらかじめ時間性のもとでは一定の形式性のもとに置かれており、決して形式なき素材というわけではない。またすでに知られていることだが、いわゆる後期フツサルにおいては「受動的総合」の名称のもとに、ヒュレー自身が固有の形式をもちあらかじめ構造化されていることが明示された。またすでに初期のフツサルにおいても空間構成のもとに固有の身体機能に基づいてヒュレーの構造化分析が着手されている。ただ『イデーニー』においては時間意識については扱わない (H.III/182) と明言しており、そのこともあってヒュレーの固有の分析はなされず、さらにヒュレーの側からの志向性分析も手がけられたとはいえない。

- (5) Fink E., Operative Begriffe zu Husserls Phänomenologie, in: Nähe und Distanz, Karl Alber, 1976, S.185.

(「フツサルの現象学における操作的概念」(新田訳)、新田・小

川編『現象学の根本問題』晃洋書房、一九七八年)

(6) A.a.O., S.189f.

(7) A.a.O., S.203.

(8) Pieper, H.J., »Anschauung« als operativer Begriff. Eine Untersuchung zur Grundlegung der transzendentalen Phänomenologie. Edmund Husserls, Meiner, 1993, 187f.

※本稿は、北陸宗教文化学会第二五回学術大会(二〇一八年一月二七日)の発表を元になっている。

※本研究は、JSPS 科研費 15K02025 の助成を受けたものです。

(すずき・こうぶん 石川工業高等専門学校一般教育科)